

# だまされた娘とちょうの話

小川未明

青空文庫



弟ていまい妹まいの多いおお、貧まずしい家いえに育そだつたお竹たけは、大おおきくなると、よそでに出はたらて働はたらかなければなりませんでした。

日ひごろ、親したしくした、近きんじよ所じよのおじいさんは、かじよの女むに向むかつて、

「おまえさんは、やさしいし、正しやうじき直じきであるし、それに、子供こどもが好すきだから、どこへいってもかわいがられるだろう。うらおもてがあつたり、じゃけんだつたりすると、きらわれて出しゆつせ世せの見み込こみが無いものだ。東とうきやう京きやうへいいつたら、からだを大だいじ事じにして、よく働はたらきなさい。」と、希きぼう望ぼうのある言ことば葉はを与あたえてくれました。

方ほうぼう々ぼうで桜さくらの花はなの咲さきはじめたころでした。お竹たけは、故こきやう郷やうに

別れを告げたのであります。

もう、こちらへきてから、だいぶ日数がたちました。かの女は、朝早く起きると、食事の仕度をし、それが終わると、主人のくつをみがき、また縁側をふいたりするのでした。

奥さまのへやには、大きな鏡が置いてありました。そうじをするときには、自分の姿が、その氷のように冷たく光るガラスの面にうつるので、つい知らず、手を頭へやつて、髪形を直したのです。

あちらで、それを見た奥さまは、女はだれでも、鏡があれば、しぜんに自分の姿を写して見るのが、本能ということを知らなそうに、

「ひまなときは、いつでもここへきてお化粧けしやうをして、いいんですよ。」と、わざとらしく、お竹たけに、いいました。

お竹たけは、さもとがめられたように顔かおを赤あかくして、なんと返事へんじをしていいかわからず、ただ、下したを向むきながら仕事しごとをするばかりでした。

奥おくさまは、つづけて、いいました。

「前まえのねえやは、それは、顔かおもよかつたし、気きがきいて、役やくにたつ子こでしたが、器量きりやうがご自慢じまんなので、ひまさえあれば、鏡かがみに向むかつて、ほお紅べにをつけたり、おしろいはけでたたいたりするので、なにもお嬢じやうさんじゃなし、パンパンでもあるまいから、気きの毒どくだけれど、いってもらったんですよ。」と、さも、おかしいことを

話すように奥さまは、笑つたのでした。

あまり、その調子がぐくだけていて、自分に対する皮肉とはとれなかつたので、お竹は、前にいた女中のことだけに、つりこまれて、

「そんなに、きれいな方なんですか。」と、奥さまの方を見て、たずねました。

しかし、奥さまのようすは、さつきの笑いと似つかず、冷ややかでした。

「ええ、それは、顔がきれいなばかりでなく、お料理だって、なんでもできたんです。」と、そつけなく答えた、奥さまの言葉には、おまえのような、田舎出とちがうという、さげすみの意味

があらわれていました。

さすがに、人のいうことを、まつすぐにしか解しなかつたお竹も、底意地のわるい、奥さまのいい方がわかつて、もうなにもいうことができませんでした。しかし、そこを立ち去りがけに、自分の顔は、そんなにみにくいのであるかと、つい鏡の方を見向かずにいられませんでした。

あわれなかの女には、まだ台所でたくさん仕事が残っていました。それをかかえると、かの女は、外の井戸端へいきました。田舎にいたときのことなど思い出しながら、せわしそうに、ポンプで水を汲み上げ、たらいの中で手を動かしたのです。

そこへ、隣の奥さんが、バケツを下げてきました。お竹は、あ

わてて、たらいを片かたすみへ押おしのけようとなりました。

「ああ。いいんですよ、そうしておいてください。私わたしは、水みずを一ぱい杯はいただけば、いいんですから。あなたは、よくご精せいがでますわ。」と、その奥おくさまは、じよさいがなかったのです。

自分じぶんの心こころに、まじりけがなかったから、こうやさしくいわれると、お竹たけは、この奥おくさんのほうが、うちの奥おくさまより、よつほど、いい人ひとのように思おもいました。そして、すぐ、打うちとける気きになつたのです。

「前まえのお女じよちゆう 中ちゆうさんは、たいへんきれいな方かただつて、そうですか。」と、かの女じよは、耳みみまで赤あかくしながら、ぶしつけに聞ききました。奥おくさんは、びっくりしたふうもせず、



「ふつうではありませんか。あの方は、ここはお給きゆうぎん金きんが安やすいから、といつていましたが。」と、答こたえました。

その後、まもなく、お竹たけが、口入くちいれ屋やの世話せわで、ある私立しりつびよう病院いんの病室びやうしつにいた、子供こどもの付き添つそいとなつたのも、どうせ勤つとめるなら、すこしでも国くにへ送おくるのにお金かねの多おほいほうがいいと思おもつたからでした。

外そとから見ると、宏壮こうそうな洋館ようかん造りづくの病院びやういんでしたけれど、ひとたび病棟びやうとうに入はいつたら、どのへやにも、青白あおしろい顔かおをして、目の落おち込こんだ病びやう人にんが、床とこの上うえで仰臥ぎようがするもの、すわつてうめくもの、笑わらい声こえひとつしなければ、長ながい廊下ろうかを歩あるく足音あしおとぐらいのものでした。あのいきいきとしたにぎやかな町まちからきたも

のには、まったく別の世界であるとしか感じられなかつたのです。いわば、ここは、病 人 だけがいるところであり、健康なもの のじつとして、いられるところではありませんでした。

「ああ、いくらお金になつても、私のくるところでなかつた。これにくらべれば、たとえ口やかましい奥さまの家でも、がまんできたのに。」と、お竹は、ぼんやりとして後悔にくれたのです。

「ねえ、おねえちゃん、なにを考えているの。なにかおもしろいお話を聞かしてくれない。」と、そばにねている少年は弱々しい声で、人なつこくいいました。

もう、長く入院しているので、少年はやせて、年よりも幼く見えるので、かの女には、いじらしかつたのでした。

「坊ちゃん、さびしいの。」と、お竹は顔を寄せるようにして、聞きました。

「もう、おねえちゃんがいるから、ぼく、さびしくないよ。」と、少年は、さもはずかしそうにして答えたのです。

「私は、坊ちゃんが、よくおなおりなさるまで、どこへもいきませんよ。」

こういうと、少年は、脊椎カリエスで、とうてい助かる見込みがないと、回診の医者はいっていました。

同じ場所でも、おとなにも気の毒な患者がいました。別に付き添いがいないので、不自由するのを見ると、お竹は、そんな人には、できるだけだけのしんせつをしたのでした。便所へつれていっ

たり、また夜中よなかにまくらの氷こおりをとりかえてやったりしました。な  
かには、

「じようぶなときとちがい、こんなからだになつて、ひとさまか  
ら、やさしくしてもらいますと、ありがたくて、ほんとうに恩おんに  
きますよ。」と、手てを合あわさんばかりにするものもありました。  
こういわれると、日ひごろ氣立きだてのやさしいお竹たけは、自分じぶんのできる  
ことは、どんなことでも、してやらなければならぬという氣持きもち  
になるのです。

ある日ひのこと、古ふるくから、この病びょう院いんへ出入でいりして、炊事婦すいじふ  
や看護婦かんごふと、顔見知かおみしりという老妻ろうばが、ふいに、お竹たけのもとへやつ  
てきて、前まえに約やく束そくがあるのだから、少しょう年ねんの付つき添そいを代かわ

つてもらいたいといいました。

「だしぬけで、お氣きの毒どくですけれど、ほんとをいうと、あんたの  
ような、若いわか、きれいな方かたは、こんなところにいるものでありま  
せんよ。どんないいお屋敷やしきでも、また、キャバレーでも、おもし  
ろくて、お金かねになるところがいくらもあるではありませんか。私わたし  
のような、おいぼれは、いくところがないから、しかたなしにこ  
んな薬くすりくさい、陰気いんきなところにいるけれど、私わたしだって、若わかければ、  
一日いちにちだってがまんできやしない。」と、老婆ろうばは、もつともらしく  
まくしたてました。

けれど、お竹たけは、少しょう年ねんがなんとというだろうか、その方ほうを  
見みましたが、老婆ろうばとは、かねて知しり合あいとみえて、だまっていた

ので、いまさらこの病びよう院いんに未練みれんのあるはずがなし、その日ひのうちうちに、暇ひまをとつて出でることにしました。

かの女じよは、老婆ろうばが、自分じぶんを美うつくしいといつたのが、いつまでも頭あたまにあつて、けつして、わるい気きがしませんでした。また口くちい入れ屋やへいいくにしても、髪かみ形かたちがきれいであれば、いつそう、いいところへ世話せわをしてくれるにちがいないと考かんえて、かねて、一度入どはいつてみたいと思おもつた、美容院びよういんを歩あるきながらさがしました。

たまたまあつた、美容院びよういんの扉とびらを推おして内うちへ入はいると、室内しつないは、いい香かおりがただよい、花はなの乱みだれるように、美うつくしい娘むすめたちが、あふれるばかり集あつまっていました。かの女じよは、顔かおがぼうつとしたが、だんだん、おちつくと、ひとりひとりの、美うつくしい顔かおを見みたのであ

りました。そして、心こころひそかに、

「さつきまでいた病びょういん院と、ここのありさまは、なんという

ちがいだろう。」と、つぶやかずにいられませんでした。

そのとき、季節きせつはずれの、大きな黒くろいちようが、どこから迷まよい

こんだものか、ガラス窓まどにつき当あたつて、しきりと、出口でぐちをさが

していました。

「かわいそうに、花園はなぞのと思おもつて、香水こうすいや、電気でんきにだまされた

んだわ。」

かの女じよは、まだ自分じぶんが、ちようど、そのちようであることに気き

がつきませんでした。

思おもいのほか、電パーマネット髪てまに手間そとどられて、外でへ出たときは、いつ

しか西にしの方ほうの空そらが、わずかに淡紅たんこう色しよくをして、日ひが暮くれていま

した。平へい常じよう、むだづかいをせず<sup>かね</sup>にためていた金かねがあるので、

これから、宿屋やどやで泊とまろうと、すでに顔かおなじみの口入くちいれ屋やへいこ

うと、その心配しんぱいはないけれど、さすがに心こころ細ほそく思おもいました。

病びよう院いんで、少しょう年ねんに田舎いなかの話はなしをしたら、

「ぼくは、そんなほたるが飛とんでいたり、魚さかなの釣つれる川かわがあると

ころが大好だいすきだ。なぜ、おねえちゃんは、こんなやかましい町まちの

中なかが好すきなのだ。」と、ふしぎそうにいったことなど、思おもい出だされ

ました。やがて、大おお通とりへ出でようとする<sup>おおどお</sup>と、路地ろじの片かたすみに、

ちようちんをつけた、易えき者しやのいるのが、目めに入はいりました。

そのちようちんには、手相てそう、身みの上判うえはん断だんと書かいてありました。



かの女じよは、それを見みると、同じ道おなみちを往來おうらいして、いくたびかためらったが、ついに、そのほうへと近づちかきました。

手相てそうを見みてくれるのは、まだ若者わかものだったが、若者わかものは、一目ひとめで、かの女じよを田舎いなかから出でて、まだ間まのないものだと知しりました。  
 さながら、あひるが、化粧けしようしたような歩あるきつきや、ただ、流りゆう行こうをまねさえすれば、美うつくしく見みえるところでも思おもっている、けばけばしくて、あかぬけのしないようすが、若者わかものにはかえつてあわれみをそそつたのでした。

「身みの上うえご相談そうだんですか。右みぎのほうの手てをお出だしください。」  
 はずかしそうにして出だす、お竹たけの手てを、掌てのひらから、つまさきまで、若者わかものは、うす暗ぐらい提燈ちようちんに照てらしながら、虫眼鏡むしめがねでこまか

にながめていたが、やがて、顔を上げると、

「あなたは、正直しょうじきですから、ひとにだまされやすい。よく、

よく、用心ようじんしなければなりません。」

お竹たけは、心こころの中なかで、これと同じおなようなことを田舎いなかで、近所きんじよの

おじいさんがいったが、あのときは、正直しょうじきだから、おまえは

人ひとにかわいがられると**い**った。都会とかいでは、どうして、反はん対たいなの

だろうか、と、考かんえながら、その後あとを聞きくと、

「年としまわりがわるいので、これから先さきに大損おおぞんをなさることがあ

る。お金かねばかりでなく、身みの上うえにも、よくよく気きをつけなければ

なりませんぞ。いま、お国くにのほうでは、あなたに結婚けっこんの話はなしが持も

ち上あがっています。だが、あなたは、あとではたいへんしあわせ

になられます。」

かの女は、顔を赤くして、幾たびも頭を下げて、その前をはなれました。

若い易者は、彼の先生から、いかなるばあいでも、相手に希望を持たせることを忘れてはならぬといましめられた、その教えを実行したまでです。

自分は、田舎へ帰れば、また、みんなから、やさしい、正直な子だといって、ほめられるだろうと、お竹は道を歩きながら、思いました。

ちようど、このとき、一時も早くかの女に出発をすすめるように、どこかの駅で鳴らす汽車の汽笛の音が、青ざめた夜空に、

遠<sup>とお</sup>くひびいたのでした。

## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「小学六年生 4巻2号」

1951（昭和26）年5月

※表題は底本では、「だまされた娘《むすめ》とちょうの話《はなし》」となっています。

※初出時の表題は「だまされた娘と蝶の話」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# だまされた娘とちょうの話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>